

ジョージ・エリオット文学における〈啓蒙〉の行方

— 前期三作品に見る宗教の再構築¹

廣 野 由美子

はじめに

19世紀のイギリスでは、前世紀に信仰回復運動が起こり、メソジストや福音主義をはじめとする宗派が派生してくるなど、英国国教会内部で刷新がはかれる動きも見られたが、慣習化した制度としての国教会は、依然として根強く地域に定着していた。その一方で、科学や社会の発展とともに、従来のキリスト教に対して懐疑の目を向ける機運が次第に高まっていった。その頂点のひとつとなったのが、1859年にダーウィン（Charles Darwin）によって発表された『種の起源』（*On the Origin of Species*）である。ただし、これによって進化論が突如提唱されたというわけではなく、フランスではコント（Isidore-Auguste-Marie-François-Xavier Comte）が『実証哲学講義』（*Cours de philoso-*

1 本稿は、日本英文学会第85回大会（2013年5月25日、東北大学）のシンポジウム「〈啓蒙〉の変遷——18世紀から19世紀の宗教・道徳・文学を問い直す」における発表「ヴィクトリア朝期における〈啓蒙〉の行方——George Eliot文学に見る宗教の再構築」に加筆したものである。

phie positive, 1830-42) において、知性や人間社会は発展してゆくという実証哲学の考え方を提唱していたし、イギリスでも、ライエル (Charles Lyell) の地質学、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の進化論社会学、ルイス (G. H. Lewes) の生理学的心理学をはじめ、各分野で進化論や有機体論の基礎を形成する思想や学問が、すでに展開されていた。

このような文化風土にあって、キリスト教信仰の問題を文学の中心テーマとすることは、次第に困難になりつつあった。19世紀のイギリスにおいて、宗教的な問題の中心部に最も真摯な態度で体当たりしようとした作家として第一に挙げられるのが、ジョージ・エリオット (George Eliot) であることは、間違いない。同時代のある批評家も述べているとおり、エリオットは、「神を信じる強い必要性と、信じることの困難さとの間で引き裂かれた時代の象徴である」²とも言えるからだ。

文学は、宗教や道徳、科学等の諸学問を有機的に含有することによって、〈啓蒙〉のための最強の媒体となり得る。本稿では、エリオット文学を主として宗教的観点から見直すことによって、19世紀のイギリスにおける〈啓蒙〉の行方を探ってみたい。

1 エリオットとキリスト教

エリオット自身は、国教会教徒の家庭に生まれたが、少女期 (9~13歳頃) に、寄宿学校の教師マライア・ルイス (Maria Lewis) の影響で、福音主義を信奉するようになった。その後10代から20代はじめにかけて、厳格なカルヴァン派に傾倒した時期もあった。エリオットは、カルヴァン派の決定論的な予定説は受け入れなかったが、人間の行為とその道徳的結果との間には必然的

2 Lord Acton's review of Cross's *Life in Nineteenth Century* (March 1885), xvii, pp. 464-85. Cf. Carrol, p. 463.

な連結があるという考え方において、決定論がのちの彼女の文学作品のなかで重要な痕跡を残すことになった。

兄が結婚して家を継いだあと、父とともにコヴェントリへ転居したエリオットは、近隣の自由主義者ブレイ夫妻（Charles and Cara Bray）との交際によって、大きな影響を受ける。とりわけ、そこで知り合ったチャールズ・ヘネル（Charles Hennell）の『キリスト教の起源に関する考察』（*An Inquiry Concerning the Origin of Christianity*, 1838）——これはキリスト教を自然史として考察した論考である——を読んで、彼女がキリスト教信仰を失い、教会に行くことを拒んで、父との間に「聖戦」を展開したという挿話は有名である。

その後エリオットは、ドイツの神学者シュトラウス（David Strauss）の『イエスの生涯』（英訳 *The Life of Jesus*, 1846）³ や、フォイエルバッハ（Ludwig Feuerbach）の『キリスト教の本質』（英訳 *The Essence of Christianity*, 1854）をドイツ語から英訳して出版したり、ドイツ観念論に大きな影響を与えたオランダの神学者スピノザ（Benedict de Spinoza）の『エチカ』（*Ethics*）⁴ を、中世ラテン語から英訳したりするなど、翻訳の仕事に次々と携わることになった。

シュトラウスの『イエスの生涯』は、福音書のなかの出来事を神話的・詩的に解釈して、キリスト教を形而上学体系に置き換えようとする試みである。エリオットはこの翻訳作業でさんざん苦しんだ末、2年かかってようやく出版へところぎ着けた。シュトラウスが、これまでの曖昧模糊たる宗教から、キリスト教信仰の本質を抽出しようとしたことに対しては、エリオットは共感を覚えたが、宗教に代わるものとして形而上学を受け入れることはできなかったし、

3 チャールズ・ヘネルの妻ルーファ（Rufa Henell）は、それまで手がけていた『イエスの生涯』の翻訳が結婚によって中断となったため、エリオットにその翻訳を依頼した。

4 エリオットは自らの意思によって『エチカ』の翻訳に取り組んだが、予定されていた出版社とルイスとの間で意見の対立があったため、結局出版されないまま終わった。

シュトラウスの還元主義的な冷たさが好みに合わず、うんざりしたようである (Hodgson 6-7)。

また、のちにエリオットがストウ夫人 (Harriet Beecher Stowe) 宛ての手紙で、「私は汎神論に自分の神殿を見出すことはできません……それは世界を、私たち人間と世界との関係の外側から見ようとするものです」(Haight, *Letters* Vol. 5, 31 [以下、*Letters* と記す]) と述べていることからもうかがわれるように、彼女は『エチカ』の翻訳をとおして、スピノザの汎神論の影響を受けることはなかった。ただし、のちのエリオットの作品のなかに現れる「利他主義」という考え方においては、スピノザの影響の痕跡が見られると言える (Dolin 175)。

しかし、何と言っても、思想形成のうえでエリオットにいちばん大きな影響を与えたのは、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』であったようだ。この翻訳に取りかかってからエリオットがわずか5カ月で仕事を終えていることから、それが彼女にとって、馴染みやすい内容の書物であったものと推測できる。フォイエルバッハは、神とその創造物とは不可分であると説いたスピノザの汎神論から影響を受けたが、さらにそこから推し進めて、「神とは、人間の空想によって作り出された必須の幻想である」と主張した。「神は人間性を高めたもの、つまり、私たち自身を完璧にしたもの」であり、人間の神との関係は「人間自身の精神的な善との関係」にほかならず、「神的存在とは人間のこと」であるとまで、彼は言う (Dolin 174-75)。

このようにフォイエルバッハは、正統派のキリスト教信仰を徹底的に覆して大胆な解釈を推し進めているが、エリオットの思想には、どのような形で共通性が見出されるだろうか。たとえば、『キリスト教の本質』の英訳出版の翌年に書いた評論「福音主義の教え — カミング博士」において、エリオットは、非人間的で偏狭な宗教の在り方を徹底的に批判し、次のように述べている。

The idea of God is really moral in its influence — it really cherishes all that is best

and loveliest in man — only when God is contemplated as sympathizing with the pure elements of human feeling, as possessing infinitely all those attributes which we recognize to be moral in humanity. . . . The idea of a God who not only sympathizes with all we feel and endure for our fellow-men, but who will pour new life into our too languid love, and give firmness to our vacillating purpose, is an extension and multiplication of the effects produced by human sympathy . . . (*Selected Essays* 66).

ここで「神」の観念を、人間の「共感」や道徳的属性の延長線上に連続するものとして位置づけている点、また、「仲間に対する感情や忍耐」といったような社会関係に神性が含まれるとしている点で、エリオットはフォイエルバッハの考え方との接近を示している。しかし、神は人間の空想が生んだ「幻想」であるとか、あるいは「神は人間」であるとまでは、エリオットは言っていないし、少なくとも彼女が書いたもののなかには、そのような表現はどこにも見当たらない。

重要なことは、エリオットが、ただこれらのドイツ思想をイギリスに紹介する先導的役割を果たしただけではなく、キリスト教に対して懐疑的な書物を学ぶことをとおして、自らも宗教の在り方を見直すという作業に取り組んだこと、そして、それが物書きとしての、彼女の出発点になったということである。ただし、それらから影響を受けつつも、エリオットはそのいずれに対しても、完全に信奉することはなかった。逆に言うと、思想や哲学に一致点を見出せなかったからこそ、彼女は小説を書くことになったのだとも言えるだろう。

エリオットは、ストウ夫人に宛てた手紙で、次のように述べている。

I believe that religion too has to be modified — “developed,” according to the dominant phrase — and that a religion more perfect than any yet prevalent, must express . . . a more deeply-awing sense of responsibility to man, springing from sympathy with that which of all things is most certainly known to us, the difficulty of the human lot. (*Letters* Vol. 5, 31)

ここには、知性と社会の進歩とともに宗教も進歩するという、コント流の発想がうかがわれる。このような信念に基づいて、エリオットが宗教を「修正」し、「人間性の宗教」(religion of humanity)⁵へと「発展」させる土台として用いたのが、小説だったわけである。また、「人間の運命の困難さに対する共感」というエリオットののちの小説のテーマの兆しが、早くもここに現れている。エリオットは、ルイスとともにドイツに旅立ち、彼と非公式の結婚生活を始めると同時に、小説家としてスタートし、名実ともに新しい人生へと乗り出した。そこで、エリオットが、思想や哲学では表現し得ない何を、いかに小説で表そうとしたのか、そして、宗教をいかに修正し発展させようとしたのかという点について、次に具体的に見てゆきたい。

2 エリオット文学に登場する宗教的人物

エリオットが最初に発表した小説『牧師たちの物語』(*Scenes of Clerical Life*)は、聖職者を主人公とした三つの物語からなる三部作である(1856年に一作ずつ*Blackwood's Edinburgh Magazine*に発表後、1858年に三作まとめて二巻本として出版)。最初に着想が浮かんだときのエリオットのアイデアは、「聖職者についての私自身の観察によるスケッチを含んだ一連の物語を書く」(*Letters* Vol. 2, 406-10)というものだった。作者の代わりに出版者ブラックウッドに原稿を送ったルイスは、これらの物語は、聖職者を「神学的側面ではなく、人間的な側面において描いたもので、ユーモアや悲しみ、悩みをもった他の人間と同じように、聖職者を描くことを目的としている」(*Letters* Vol. 2, 269)と代弁している。しかし、「神学的側面ではない」とは言っても、それま

5 マロック (W. H. Mallock) がエリオットについて言及するさいに用いた言葉 (Carroll 456)。なお、エリオット自身は手紙のなかで「未来の宗教」(religion of future)という言葉を用いている (*Letters* Vol. 6, 216)。

でのエリオットの心を占めてきた大きな要素、彼女の経歴、そして何よりも聖職者を主人公にした作品群であることなどを考え合わせると、その作家としての出発点が、キリスト教との関連から切り離せないことは明らかだ。「人間的な側面」において、宗教がいかなる働きを成すかを小説で示すことが、作家としてのエリオットの主要なねらいであったにちがいない。

さて、この処女作に収められた物語において、エリオットは、彼女ののちの小説に登場してくる宗教的人物たちの、代表的な三つのタイプを創り出しているように考えられる。第一作目「エイモス・バートン師の悲運」(“The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton”)の主人公、シェパートン教会牧師エイモス・バートンは、ふつうの人間のさまざまな欠点を併せ持った平凡な人間である。時代は1830年代ごろで、「教区民たちは次第に、危険な知識の木の実を味わい、ともすると厄介な目の開かせ方をする革新というものを知る」(SCL 86)ようになり、牧師に対して批判的な態度をとるといった世相が表れている。凡庸なバートンは、居候の伯爵夫人との間にスキャンダルを立てられ、非難の的となるが、妻に先立たれて「悲しみ」を経験することにより、初めて村人たちの共感を勝ち得る。聖職者たる者が、説教や教義によって人を動かすのではなく、むしろ彼自身の人間的悲しみの経験のほうがよほど役に立つ、というメッセージを含んだこの物語は、宗教としてのキリスト教の力を否定しているとも解釈できる。バートンは、このような「人格的な欠点の持ち主として、批判の対象となる宗教的人物」という第一のタイプ(10頁の〈表1〉の横列①)の原型となる。

第二作「ギルフィル氏の恋物語」(“Mr Gilfil’s Love-Story”)は、聖職者の過去の恋物語の回想で、前作と同様、宗教的色彩の希薄な物語である。ギルフィルは、バートンの前任の教区牧師であるが、時代背景は、信仰復興運動の影響がまだ見られない時期で、彼は教区民から絶大な信頼を寄せられ、慕われている。ギルフィル自身は常識的なありふれた説教しかせず、村人たちとの談話を楽しむ世俗的な人物であるが、そんな彼にも、悲恋にまつわる過去のエピソード

ドがあったというわけだ。このような、「よき隣人、助言者であるが、宗教的熱意が希薄な教区牧師」(〈表1〉の横列②)が、第二の宗教的人物のタイプである。

第三作「ジャネットの悔悟」(“Janet’s Repentance”)の主人公トライアンは、熱烈な使命感をもった福音主義牧師である。舞台は1830年代初めごろのミルビーに設定され、この町は、新しい宗教上の運動が見舞った最後の土地のひとつであるとされている。当時の宗教的状况は、トライアンを支持する村人のひとりジェロウムが、彼に向って、「あなたが来る前は、ミルビーは死んだような暗い所だった。教会で神の言葉をわかるように話してくれたのは、私の知るかぎりあなたが初めてだ」(SCL 253)と述べているような有様である。トライアンは、弁護士デンプスターを筆頭とした、旧来の国教会制度を守ろうとする一派から猛烈な反撃を受け、排斥運動の対象となる。しかしトライアンは、自らの病気も顧みず、ミルビーの人々の魂の救済のために命を賭け、最後は、デンプスターの虐待によって飲酒癖に陥った妻ジャネットの救済を見届けて、死ぬに至る。このような「熱烈な使命感の持ち主、奉仕者、求道者、殉教者」(〈表1〉の横列③)が、第三の宗教的人物のタイプである。

処女作品に登場した以上の三つタイプの宗教的人物は、それぞれ姿を変えながら、エリオットののちの作品にも現れ続ける。次作品『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859)では、通常、主人公アダムとヘティーの悲劇を中心とした物語に、読者の注意が集中しがちであるが、最初にエリオットの着想のきっかけとなったのは、メソジスト派の平信徒宣教師のおばエリザベス・エヴァンズから聞いた実話であった(Hodgson 4)。したがって、ホジソンも指摘するところ、この作品を「ダイナを主要人物とした、もうひとつの『牧師物語』とすること」が、エリオットの本来の構想であったと言える⁶。したがって、1797

6 「アダムは典型的なイギリス人であるばかりか、典型的な人間、こつこつとまじめに働き、成長してよくなる可能性があるというエヴリマンである。……しかしこ

年という歴史的な時代のなかに位置づけられた物語のなかで、メソジストとして布教活動をし、ヘティーの救済者としての役割を果たしたダイナは、トライアンの後継者とも言うべき、熱烈な使命感をもった禁欲的な奉仕者である「第三タイプの宗教的人物」として位置づけられる（〈表1〉参照：横列③／縦列AB）。

そして、この作品には、もうひとりの聖職者アーウィン師が登場する。アーウィンは、アーサーやアダム、ヘティーのよき理解者であり、かつメソジストであるダイナにも好意を抱いている。アーサーとヘティーの過ちが犯罪へと至り、裁判が行われたときにも、アーウィン師は彼らのために尽力する。彼は教区民たちのよき隣人、理解者、協力者、アドバイザーであるが、熱烈な宗教観をもった人物としては描かれていない。彼は典型的な国教会教区牧師で、このタイプとしては、エリオット作品のなかでは最も理想的な人物であるとも言える（〈表1〉参照：横列②／縦列AB）。

エリオットの第三作目の長編小説は *The Mill on the Floss*（〈表1〉の縦列MF）であるが、この作品について詳述する前に、まず〈表1〉全体をざっと見渡しておく。横列①の「人格的欠陥の持ち主、批判の対象」を見ると、『サイラス・マーナー』（*Silas Marner*）では、具体的な人物名はなく、強いて言うなら、くじ引きでサイラスを無実の罪に陥れたランタン・ヤードの狂信的な信徒たちが、揶揄の対象となっている。エイモス・バートンは、スキヤンダルの対象として批判はされても、人物としては平凡なだけで、特に道徳的欠陥があるわけではないが、『ミドルマーチ』（*Middlemarch*）のカソーボン、かなり人格的な傷が目立つ人物である。バルストロードは聖職者ではないが、熱心

、の小説は、たんなるよい人間の物語ではなく、並外れた女性ダイナの物語である。第二のアダム、すなわち聖母の姿をとったキリストとして現れるのは、アダム・ビードではなく、ダイナ・モリスなのだ」と、ホジソンは主張している（Hodgson 46-47）。

〈表1〉 ジョージ・エリオット作品における宗教的人物タイプ

作品 (出版年)	SCL (1858)	AB (1859)	MF (1860)	SM (1861)	Romola (1863)	FH (1866)	Middlemarch (1871-2)	DD (1876)
①人格的欠陥の 持ち主、批判の 対象	エイモス・バー トン		【ドドノン家・ タリヴァー家を はじめとする聖 オググの人々】	ランタン・ヤー ドの狂信的信者 たち(非国教徒)			カンノーボン 【偽善者バルス トロウド】	
②よき隣人、助 言者、宗教的熱 意の希薄な教区 牧師	ギルフィル	アーヴィン	ケン博士	(ラヴィローの 村人たち)			フェアブラザー	ガスコイン
③熱烈な使命感 の持ち主、 奉仕者、求道者、 殉教者	トライアン (福音主義) ⇒ジャネットへ の影響、ミルビ ーでの布教	ダイナ・モリス (メソジスト) ⇒ヘテライーへの 影響、布教・奉 仕活動	【マギー】 (トマス・ア・ ケンピスの影 響)		【ロモラ】 (ドメニコ会派 修道僧サヴォナ ローラの影響) ⇒疫病の村での 奉仕活動	【フィリーク ス・ホルト】(急 進主義者、非国 教徒) ⇒エスタ への影響、労働 者の啓蒙	【ドロシア】 ⇒リドゲイト、 ロザモンド等へ の影響	【ダニエル】 (ユダヤ主義) ⇒グウエンドレ ンへの影響、ユ ダヤ民族への共 感

【 】内の人物は非聖職者

な宗教家で、その偽善者ぶりが批判的に描かれている。

次に〈表1〉の横列②の「よき隣人」タイプを見ると、『フロス河の水車場』では、マギーがスティーヴンとの駆け落ち後、聖オッグの町に帰って来て批判に晒されたとき、彼女に助力の手を差し伸べる聖職者ケン博士を挙げることができる。彼はマギーに協力して自らの義務を果たそうとするが、彼女との関係について悪評がたつと、教区民との不和を恐れて、彼女に牧師館を出て行くようにと促す。したがって、ケン博士は、宗教的熱意という点でのイメージは希薄で、むしろ良識人、助言者の範疇に留まる。『ミドルマーチ』に登場するフェアブラザーは、よき隣人という側面と、俗人という側面を併せ持ち、明らかに第二のタイプに属する（なお、『フィーリクス・ホルト』のライアンは非国教会派の教会堂牧師であるが、彼は女主人公エスタの出自との関連でプロット上重要な人物であって、聖職者としては周辺の人物であるため、表では省いた）。『ダニエル・デロンダ』のガスコイン師に至っては、元軍人で、聖職者になると同時に名前に二重母音を取り入れた俗っぽい人物として描かれている。

こうして表を全体にわたって眺めると、後期の作品になるほど、次第に聖職者の位置が中心から周縁的存在へと変わっていることがわかる。〈表1〉の『フロス河の水車場』（縦列MF）の前で引かれている波線は、この作品を境目として、ある顕著な変化が見られることを示す。また角括弧【 】で括った人物は、聖職者ではないことを示す。すると、『アダム・ビード』のダイナ以降は、熱烈な使命感をもった聖職者は、もはや登場しないことがわかる。言い換えると、それに代わる後継者として、聖職者ではない第三タイプ——自分の人生に対して熱烈な使命感をもち、禁欲的な奉仕に自らを捧げようとし、求道僧のごとく高貴な生き方を求める人物——が登場してくるようになるのだ。このように、聖職者から世俗化した、道を求める孤高の人物の系譜が出現する。その最初の人物として登場するのが、『フロス河の水車場』のマギーなのである。

『サイラス・マーナー』には、これに当たる人物が登場しない。この作品で

は、教区牧師などの聖職者は登場せず、サイラスを取り巻く善意の村人たちが、よき隣人の役割を果し、拾われた子供エビーが、いわば神の恵みとしての存在となってサイラスを救うという、例外的な形の作品である。15世紀末のイタリアを舞台とした歴史小説『ロモラ』では、女主人公ロモラが、19世紀初めの地方都市を舞台とした『ミドルマーチ』では女主人公ドロシアが、第三タイプの後継者として、求道者の生き方を展開する。『フィーリクス・ホルト』では、フィーリクスが、労働者たちの啓蒙に自らを捧げつつ、女主人公エスタの意識改革にも影響を与えるという構造である。『ダニエル・デロンダ』では、デロンダが女主人公グウェンドレンを啓発すると同時に、ユタヤ民族全体への共感のために生きる道を選ぶ。この最後の作品に至って、もはや宗教はキリスト教に限定さえされず、さらなる広がりを示すに至っている。

3 前期3作品に見られるエリオットの宗教観

次に、比較的宗教色の濃厚な前期三作品『牧師たちの物語』、『アダム・ビード』、『フロス河の水車場』を取り上げて考察を進める。具体的には、これらの作品における第三タイプの人物に焦点を置いて、宗教的な内容に関連するテキストの言説を中心に分析する。そこからエリオットの宗教に対する考え方を抽出することによって、彼女がこれらの作中人物をとおしてどのような〈啓蒙〉を試みようとしていたのかを探ってみたい。

(1) トライアン——「ジャネットの悔悟」

『牧師たちの物語』では、「ジャネットの悔悟」のトライアンに焦点を置いて検討する。作品のなかで語り手は、「私は愛のない人々の群れのなかを突き進み、険しい道を苦勞しながら歩いて行く彼（トライアン）と同じ水準に立ち、同じ重圧のなかにある」（SCL 266）と述べている。この「私」とは、作者自身の声に近いもので、エリオットが、聖職者トライアンの立場を、作家として

の自分の立場と重ね合わせつつ、肯定的に捉えているさまがうかがわれる。

ジャネットは、残酷な夫から虐待され、その苦しみから逃れるために飲酒癖に陥り、絶望感を味わう。彼女が母親に向かって述べる嘆きの言葉からは、神に対する逆恨みと不平、自暴自棄な自己憐憫しかうかがうことができない。夫の暴力がエスカレートして、ついに家から追い出されたジャネットは、トライアンに救いを求め、自分の弱さや愚かさ、悪癖について告白する。心を動かされたトライアンは、自分もかつて罪を犯したことがあることを、彼女の前で告白する。彼はそうした自分の実体験に基づいて、信仰についての自分の信念（厳密に言うと、自分が過ちを犯したとき、友から聞いた言葉）を、次のように語る。

“He [Christ] neither condemns nor reproaches you for the past, He only bids you come to Him that you may have life: He bids you stretch out your hands, and take of the fullness of His love. You have only to rest on Him as a child rests on its mother’s arms, and you will be upborne by His divine strength. That is what is meant by faith.”
(SCL 302)

ここでトライアンが説いているのは、罪を責めも罰もせず、ただ苦しみが癒やして助ける、受難者としてのキリストの在り方である。そして、聖職者である彼自身も、そのようなキリストと人間の関係を模倣して、高みから厳しく説教するような態度を取らず、苦しむ人間と同レベルの位置に立って、共感によって悲しみを癒やそうとする。この「共感」の作用によって、ジャネットは救われるのである。

トライアンは病気であるにもかかわらず、自らの身体を顧みず、奉仕活動に専念する。このような自己滅却的な奉仕の態度が、彼の聖職者としてのもうひとつの特色である。ジャネットが、トライアンの死が近いことを予感した場面で、次のような描写が見られる。

The thought of Mr Tryan was associated for her with repose from that conflict of emotion, with trust in the unchangeable, with the influx of a power to subdue self. To have been assured of his sympathy, his teaching, his help, all through her life, would have been to her like a heaven already begun — a deliverance from fear and danger; but the time was not yet come for her to be conscious that the hold he had on her heart was any other than that of the heaven-sent friend who had come to her like the angel in the prison, and loosed her bonds, and led her by the hand till she could look back on the dreadful doors that had once closed her in. (SCL 347) [下線筆者]

「彼の共感と教え、助けを一生確保できれば、彼女にとっては天国がすでに始まっているようなものだった」という表現からは、トライアンとジャネットの関係の深まりがうかがわれる。また、トライアンはジャネットにとって、「天から遣わされた友以上の存在」(下線部)であったと述べられていることから、二人の関係が、いつしか友情から恋愛関係へと変化していったことが、暗示されている。最後にトライアンはジャネットに接吻して息を引き取る。「恋する求道者」というのが、この第三タイプのもうひとつの特色でもある。

「悲しみを介した人間の共感」が、エリオットにとって不可欠の点であり、「受難を経たイエス」の人間に対する愛を、そこに重ね合わせて見ようとするのが、彼女の宗教観の中心概念となっているさまが、この作品からうかがわれる。

(2) ダイナ・モリス — 『アダム・ビード』

次に『アダム・ビード』について検討する。ヘティーが嬰兒殺しの罪を犯したとき、婚約者アダムは、彼女を誘惑したアーサーに罰を与えたいと、復讐心を募らせる。典型的な英国国教徒であるアダムにとっての神とは、人間の過ちを罰する神、正義を遂行する裁きの神のイメージとして捉えられている。アダムから心境を打ち明けられた教区牧師アーウィンは、アーサーの良心を信じて彼をかばい、アダムの復讐心が悪徳であることを説いて諫める。アーウィンは「道義的な罪と応報をどのように割り当てるかは、我々人間のやることではな

い] (AB 424) と言うとき、この温厚な牧師の教えの背後にも、罰を与える役は神にあるという前提が見られる。

この一般的なキリスト教の観念と、メソジストであるダイナの考え方には、どのような相違があるだろうか。ダイナが独房を訪れて、ヘティーに対して述べている言葉を見てみよう。

“Don’t you know me, Hetty? Don’t you remember Dinah? Did you think I wouldn’t come to you in trouble? . . . I’m come to be with you, Hetty — not to leave you — to stay with you — to be your sister to the last. . . . But, Hetty, there is some one else in this cell besides me, some one close to you. . . . And on Monday, when I can’t follow you, — when my arms can’t reach you, — when death has parted us, — He who is with us now, and knows all, will be with you then. It makes no difference — whether we live or die, we are in the presence of God. . . . My poor Hetty, death is very dreadful to you. I know it’s dreadful. But if you had a friend to take care of you after death — in that other world — some one whose love is greater than mine — who can do everything. . . . If God our Father was your friend, and was willing to save you from sin and suffering, so as you should neither know wicked feelings nor pain again? If you could believe he loved you and would help you, as you believe I love you and will help you, it wouldn’t be so hard to die on Monday, would it?” (AB 448-50) [下線筆者]

ここでダイナは、神を高遠な存在としてではなく、苦しむ人間に共感し、生けるときも死せるときもつねにいっしょにいて慰め助けてくれる身近な友のような存在として、人間と同レベルに位置づけている。二箇所の下線部にも“friend”という表現が見られる。このようにしてダイナは、頑なに閉ざされたヘティーの心を開き、罪の告白へと導いてゆく。そして、ダイナは自らも、神と人間の友人関係を模倣して、ヘティーの友として最後までいっしょにすることを実践しようとする。

ちなみに、ヘティーが恩赦によって死刑を免れて流刑地に送られたあと、ダイナは恋する女性へと変貌する。アダムから求婚された彼女は、自分が愛に溺

れて他人や神の存在を忘れてしまうのではないかと悩むが、結局は、信仰との矛盾はないという結論に達して結婚し、制度上の決まりに従って、宣教師をやめる。いかに理屈をつけても、やはり彼女が男性への愛を選んだことは否めない。信心深いセスから恋されているダイナが、彼を選ばず、愚かなヘティーの美貌に目が眩むようなアダムの男性的魅力に惹かれたことも、興味深い。ダイナが最後に、聖職者から俗人に転じたことは、象徴的であるとも言える。なぜなら、その後の作品において登場する、この第三の求道者タイプは、完全に世俗化して、もはや聖職者としての姿を留めなくなるからである。そうして登場する新しい俗人の求道者が、『フロス河の水車場』のマギーなのである。

(3) マギー — 『フロス河の水車場』

『フロス河の水車場』は、第1部「少年少女」(Boy and Girl)、第2部「学校時代」(School-Time)という教養小説風のタイトルから転じて、タリヴァー一家が破産の憂き目に会う中盤から後半にかけては、第3部「転落」(The Downfall)、第4部「屈辱の谷」(The Valley of Humiliation)、第5部「小麦と毒麦」(Wheat and Tares)、第6部「大いなる誘惑」(The Great Temptation)、第7部「最後の救済」(The Final Rescue)といったタイトルが付けられていることから、聖書や『天路歷程』(John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*, 1678)などとの関連が示唆され、キリスト教的な雰囲気漂った作品である。

女主人公マギーは、幼いころからジプシーのような外貌の気性が激しい少女で、成長してからは、性的魅力によって、父の仇敵の息子フィリップや、従妹ルーシーの婚約者スティーヴンを惹きつけるような奔放な女性で、ダイナとは対照的に⁷、聖職者らしいイメージとは正反対の異教徒的な要素をもった女主人

7 「ダイナは、事実上、魂のみで肉体を伴わない存在である。彼女はあたかもこの世に死んで生まれ、復活後の状態で生きているようなものだ」と、ホジソンは指摘している (Hodgson 50)。

公である。

しかし、一家の転落後、不幸な生活のなかで、マギーがトマス・ア・ケンピス（Thomas à Kempis, 1379/80-1471）の著書に出会い、この中世ドイツの神秘主義神学者の説く禁欲的な教えに傾倒するくだりは、ことにこの作品に色濃い宗教性を与えている。マギーがこの書物を読んで、大きな影響を受けた箇所には、次のような部分がある。

Know that the love of thyself doth hurt thee more than anything in the world. . . . On this sin, that a man inordinately loveth himself, almost all dependeth, whatsoever is thoroughly to be overcome; which evil being once overcome and subdued, there will presently ensue great peace and tranquillity. . . . Forsake thyself, resign thyself, and thou shalt enjoy much inward peace. (*MF* 289-90)

自分への愛を否定し、「汝自身を捨て去り、諦めよ」というこの自己滅却の教えに、マギーは従い、苦行に没頭することに希望を見出す。マギーに思いを寄せるフィリップは、彼女のこのような態度が、「狭い禁欲主義」(*MF* 306)、「自己欺瞞という狂信」「自分を麻痺させようとする事」(*MF* 327-28)であると批判する。このことから、作者がトマス・ア・ケンピスの宗教思想を必ずしも肯定しているわけではないことが、見てとれる。

マギーが、スティーヴンとともにボートに乗って川を流されて行きながら、彼から駆け落ちを迫られ、誘惑と戦っているとき、彼女の心のなかに、神の概念が次第に明確な形をとって現れ始める。

Where, then, would be all the memories of early striving — all the deep pity for another's pain, which had been nurtured in her through years of affection and hardship — all the divine presentment of something higher than mere personal enjoyment, which had made the sacredness of life? . . . “Ah, God! preserve me from inflicting — give me strength to bear it.” (*MF* 458) [下線筆者]

下線部に見られるとおり、「神から示されたもの」「人生の聖なるもの」によって、マギーは良心を刺激され、最後は神への祈りの言葉を発するに至るのである。別れを決意したマギーは、「過去」や「義務」がいかに重要であるかということの説明して、スティーヴンを説得するが、頑として応じない彼に対して、次のように述べる。

“I couldn't live in peace if I put the shadow of a willful sin between myself and God. . . . We can only choose whether we will indulge ourselves in the present moment, or whether we will renounce that, for the sake of obeying the divine voice within us — for the sake of being true to all the motives that sanctify our lives.” (MF 476-77) [下線筆者]

ここでは、下線部の表現に見られるとおり、人生を「神聖なものにする」ための「自分の内なる声」、すなわち良心が、「神の声」として位置づけられている。

スティーヴンと別れて、ひとり聖オグの町に帰ったマギーは、墮ちた女の烙印を押され非難の声を浴びて、行き場を失う。そこへスティーヴンからの手紙が届き、最後の誘惑と戦った果てに、以前暗唱していたトマス・ア・ケンピスの言葉——“I have received the Cross, I have received it from Thy hand; I will bear it, and bear it till death, as Thou hast laid it upon me.” (MF 515) ——が、ふたたび彼女の脳裏に浮かぶ。マギーは次のように続ける。

“I will bear it, and bear it till death. . . . But how long it will be before death comes! I am so young, so healthy. How shall I have patience and strength? Am I to struggle and fall and repent again? — has life other trials as hard for me still? . . . O God, if my life is to be long, let me live to bless and comfort —” (*Ibid.*)

マギーの神への祈りの言葉が半ばで途切れた、ちょうどそこへ洪水が訪れる。これはあたかも、苦しい人生が短いものであってほしいと願うマギーの祈りに対して、神が応え、天災を引き起こして彼女に甘美な死をもたらしたという運

びのようにも、読める。

さて、結末の「洪水」をいかに解釈すべきかは、この作品をめぐる、これまで議論を引き起こしてきた問題である。作品が書かれた時代背景を考えると、ひとりの女性の祈りに対して、神が奇跡を起こして応えるといったような神学的解釈に対して、読者はためらいを覚えずにはられない。一見、強引なプロット上の解決にも見えるし、それを作品の弱点として批判する批評家も少なくない⁸。しかし、エリオットがこの小説の執筆に先立って洪水に関する年報記録を調査していること (Haight, *Biography* 302) から、洪水がもともと重要な計画の一部であったことがうかがわれる。そこから、さまざまな多義的な解釈が生じてくるのである。そこで、本論でもひとつの解釈を試みてみたいと思う。

作品の前半に遡ってみると、第1部第12章で、語り手は聖オッグにまつわる伝説を紹介している。かつて渡守オッグが、幼子を抱いてほろを身にまとった女の求めに応じて、嵐のなかを川岸までボートで送り届けたところ、その女は神々しいマリアの姿に変貌し、「今後、汝のボートに乗る者は、嵐から守られる。汝のボートが救助に向かえば、人間も家畜も命が守られる」と予言したこと。その後、洪水が起きても、オッグのボートによって多くの人々が助けられたこと。そして、オッグ亡きあとも、夕暮れにはこのボートの姿が現れる、というのが伝説の内容である。

これに続いて語り手は、聖オッグの町の世界風土について、次のように述べている。

And the present time was like the level plain where men lose their belief in volcanoes and earthquakes, thinking to-morrow will be as yesterday, and that giant forces that

8 Henry James, *Atlantic Monthly* (1866); F. R. Leavis, *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad* (1948); W.J. Harvey, *The Art of George Eliot* (1961); Barbara Hardy, *Critical Essays on George Eliot* (1970) など。Cf. Rignall, p. 266.

used to shake the earth are for ever laid to sleep. The days were gone when people could be greatly wrought upon by their faith, still less change it . . . One aged person remembered how a rude multitude had been swayed when John Wesley preached in the cattle-market; but for a long while it had not been expected of preachers that they should shake the souls of men. (*MF* 118)

大地を揺るがす天災についての人々の記憶が、もはや忘却の彼方へと消え去っていることを示すこの語りは、結末で洪水が起ることに対する伏線の役割を果たしている。

また、フロス河畔で暮らす古風で偏狭なドドソン家や、タリヴァー家の人々の精神状況を、語り手は、次のように宗教的文脈において表現している。

Here, one has conventional worldly notions and habits without instruction and without polish — surely the most prosaic form of human life . . . Observing these people narrowly, even when the iron hand of misfortune has shaken them from their unquestioning hold on the world, one sees little trace of religion, still less of a distinctively Christian creed. Their belief in the Unseen, so far as it manifests itself at all, seems to be rather of a pagan kind . . . Their religion was of a simple, semi-pagan kind, but there was no heresy in it — if heresy properly means choice — for they didn't know there was any other religion, except that of chapel-goers, which appeared to run in families, like asthma. (*MF* 272-73)

これは、宗教の本質的な意味が完全に骨抜きになって、たんなる慣習、いやそれ以下の伝染病のようなものにさえなり下がってしまった、背信的な状態の描写である。そして、これらの一族は、イギリスの地方に住む当時の一般市民の精神状態を代表するものであったと言える。

このような聖オグの町を、「洪水」という天災が襲ったわけだ。神学的観点から見れば、この洪水はいわば、無信仰に陥った人々を揺り動かし、大地の巨大な力、つまり神の力を思い知らせる出来事であったとも解釈できる。精神的な惰眠を貪る人々のなかにあって、マギーがまさに命がけでいかに生きるべ

きかを問うとき、町の人々が異教徒へ、異教徒的なマギーがキリスト教的な人物へと反転するのである。

最後に、十字架を負うという受難を決意したマギーが、神に向かって叫ぶ先に引用した場面は、あたかも、十字架にはりつけられたイエスが、「わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」（『マルコによる福音書』第15章第34節）と叫ぶ場面と重なり合うようだ。イエスがその直後に息を引き取り、地震が起って神殿の幕が真二つに裂けたように、マギーの祈りの言葉に答えるがごとく訪れた洪水が、彼女に救いとしての死を与えるという運びになる。ボートに乗って、人々を助けるために漕ぎ出すマギーは、伝説の聖者オグの姿とも重なり合う⁹。

マギーは、魂の死せる町で、いわば聖オグの再来として、殉教するのだ。聖オグ伝説と大きく異なる点は、マギーとトムに乗るボートが転覆し、二人が命を落とすことである。これは何を意味しているのだろうか？ 二人の乗るボートを転覆させたのは、木製の機械の巨大な破片が塊となって突進してきたためである。この“machinery”という言葉は、聖書的世界には馴染まず、科学が発達し産業化した近代のイメージを連想させる。そうすると、この舟の転覆は、近代におけるキリスト教の終焉を象徴しているとも言える。実に奇妙なのは、この洪水については、これまで見てきたような神学的解釈が可能である一方で、科学的な解釈も可能であるように描かれていることである。洪水の5年後のフロス河畔を描いた結末の部分を見てみよう。

Nature repairs her ravages — repairs them with her sunshine, and with human

9 ちなみにマギーは、スティーヴンとともに川を流されて行ったとき、夢を見る。それは、ルーシーがマリアで、トムが船頭となって漕ぐボートが通り過ぎてゆく夢だった。この夢から目覚めたマギーは、スティーヴンとの別れを決意するのだが、誘惑で麻痺していたマギーにとって、この夢は、いわば彼女に十字架へと向かわせるお告げのような役割を果たしていると言えるだろう。

labour. The desolation wrought by that flood, had left little visible trace on the face of the earth, five years after. . . . And every man and woman mentioned in this story was still living — except those whose end we know. Nature repairs her ravages — but not all. The upturn trees are not rooted again; the parted hills are left scarred: if there is a new growth, the trees are not the same as the old, and the hills underneath their green vesture bear the marks of the past rending. To the eyes that have dwelt on the past, there is no thorough repair. (*MF* 521–22)

ここに描かれている「自然」は、破壊と修復を繰り返しつつ淘汰してゆく「ダーウィニズム」の世界観を映し出している。これに続いて、水車場の近くの墓地に、タリヴァー兄妹の遺骸が、父の墓のかたわらに葬られていることが語られる。タリヴァー家の人々は、環境的にも社会的にも、生き残れず淘汰されてしまった者たちであるということが、物語が閉じられたとき、余韻として残るのである¹⁰。

1859年11月、ダーウィンの『種の起源』が発表されたとき、エリオットはすぐにこれを読んだが、同年1月に執筆を始めていた『フロス河の水車場』は、そのころには終わりのほうに差しかかっていた¹¹。ジリアン・ビア (Gillian Beer) は、のちに書かれた『ミドルマーチ』や『ダニエル・デロンダ』では、ダーウィンの議論¹²がじゅうぶん吸収されているが、『フロス河の水車場』を

10 また、ダーウィン説においては、種の変化として「変態」という考え方も提示されている。原始的な異端児から信心深い文化的な美しい女性へと成長したマギーは、いわゆる「醜いアヒルの子」であり、「変態」を体現している人物であるとも言える。

11 エリオットは日記に、「私たちは今晚、種の起源に関するダーウィンの本を読み始めた。あまり出来がよくないようだ。興味深いことはたくさん盛り込まれているが、明瞭に整然と提示されていないため、印象が薄い」と書いている。しかし、その二日後に書いた手紙では、「進化論を巧みに立証していて、画期的である」(*Letters* Vol. 3, 214) とも評している。Cf. Beer, p. 146.

12 エリオットは、『種の起源』におけるダーウィンの議論を、有機体論——「生き

書いた段階では、エリオットはダーウィンの思想が未消化の状態だったと指摘している (Beer 146-48)。しかし、すでにライエルやスペンサー、ルイスなどをとおして進化論に精通していたエリオットが、最初に進化論的な語彙を作品に持ち込んだのは、『種の起源』の出版と同年に書かれた『フロス河の水車場』であったことも、確かである。それは、キリスト教を科学的発見の時代に合わせて再構成したいというエリオットの願望が、より顕著なものになっていたことの表れとも言える。結末の「洪水」は、科学の時代における宗教の可能性と限界、そして変容のさまが、調和という形ではなく、亀裂と混沌という形となって象徴的に現れている、というように見ることもできるのではないだろうか。

結 び

以上、エリオットの前期三作品について検討してきた。『牧師たちの物語』から『アダム・ビード』、『フロス河の水車場』へと進むにつれて、舞台の共同体の性質や、自然と人間の関係など、さまざまな要素が徐々に変化していつている。しかし、特に本論で重点的に論じた宗教的側面に関してまとめるならば、求道者・殉教者タイプの人物が、宗派の違いを超えて、そして徐々に世俗化しながら変容しつつ、引き継がれていつていることがわかった。

では、最初の問いに立ち返ってみよう。つまり、エリオットは、思想や哲学では表現し得ない何を、いかに小説で表そうとしたのか。小説をとおして宗教をいかに修正し、発展させようとしたのか、という問題である。エリオットは、はじめは聖職者を、そしてのちにはふつうの人間を求道者・殉教者として創造

ゝているものも絶滅しているものもすべて、ひとつの大きな体系にまとめて……最も複雑に広がる類似の系列によって結びつけることができる」という考え方——という形で吸収している (Dolin 201)。

し、その人物に受難の道を歩ませ、悲しみを経て生じた「共感」をとおして、人間相互間での救済を実現するという形のストーリーを編み出していった。そして、この「共感」を、神対人間から、人間対人間、そして個人対個人の関係から複数、そして社会全体、民族全体へと次第に拡大してゆくというように、エリオットは宗教を人間の現実生活のレベルに移し替えていったと言えるだろう。これを人々に伝え啓蒙するうえで、最も有効な媒体は、エリオットにとっては、ストーリーとして実例の形で示すことのできる小説であったのだと考えられる。

『アダム・ビード』の第17章に、「宗教とは観念とは別のものだ。人々に正しいことをさせるのは、観念ではなく感情だ」(AB 181)というアダムの言葉がある。結局エリオットのやり方は、宗教や神の存在を否定するわけではなく、感情的に取り入れられる部分を取り入れて吸収し、新しいヒューマニズムへと改造してゆく——だから、宗教と感情的に連続しているのであって、打ち壊す必要はないという論理に支えられている。それは、イギリス以外の国から見れば、理解し難いようないい加減な実利主義的なやり方にとれるかもしれない。ドイツの哲学者ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) は『偶像たちの黄昏』(Götzen-Dämmerung, 1889)で、中産階級の時代遅れの価値観に対して怒りの声を浴びせるとき、エリオットを槍玉に上げて、こう述べている。

G・エリオット——キリスト教の神を排除しておきながら、キリスト教道徳にしがみつかなければならないと、ますます固く信じこむ。これがイギリスの一貫性というものだ。この点で、エリオット流の女性道徳主義者を責めたいとは思わない。イギリスでは、神学からちょっとでも解放されたあとは、道徳狂信者とは何かということを実に荘厳なやり方で示すことによって、回復をはからねばならないのだ。……イギリス人ではない我々は、別のやり方をする。キリスト教信仰を捨てたなら、キリスト教道徳を説く権利を足元から引き離してしまうのである。(Dolin 188)

しかし、エリオットにしてみれば、安易に宗教にしがみついているつもりはなく、捨ててしまわなくとも、良いものを生かして改造し、発展させればよいで

はないか、という考え方だったのであろう。そういう伝統保持の態度、そして、感情によって着実に道筋を辿ってゆこうとする姿勢は、たしかにイギリス的と言えるかもしれない。神学や形而上学、哲学といった抽象的世界でキリスト教を打ち壊し、けりをつけるよりも、文学の世界で人間学に移し替えようとする。それが、イギリス的な「啓蒙」の特色のひとつであり、エリオットは、その方向性を指し示す道標のような作家として、見直すことができるのではないかと思う。

参考文献

- Bear, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. 3rd edition. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Carrol, David (ed.) *George Eliot: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1971.
- Dolin, Tim. *George Eliot*. Authors in Context Series. New York: Oxford UP, 2005. [ティム・ドリン著、廣野由美子訳『ジョージ・エリオット（時代のなかの作家たち5）』彩流社、2013]
- Eliot, George. *Scenes of Clerical Life*. Ed. Jennifer Gribble. Harmondsworth: Penguin, 1998.
- . *Adam Bede*. Ed. Stephen Gill. Harmondsworth: Penguin, 1980.
- . *The Mill on the Floss*. Ed. Gordon S. Haight. Oxford Oxford UP, 1996.
- . *Selected Essays, Poems and Other Writings*. Ed. A. S. Byatt and Nicholas Warren. Harmondsworth: Penguin, 1990.
- Feuerbach, Ludwig. *The Essence of Christianity*. Translated by George Eliot (1854). New York: Cambridge UP, 2012.
- Haight, Gordon S. (ed.), *The George Eliot Letters*, 9 vols. New Haven: Yale UP, 1954–56, 1978.
- . *George Eliot: A Biography*. New York: Oxford UP, 1968.
- Hodgson, Peter C. *Theology in the Fiction of George Eliot*. London: SCM Press, 2001.
- Levine, George (ed.). *The Cambridge Companion to George Eliot*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Qualls, Barry. "George Eliot and Religion." *The Cambridge Companion to George Eliot*. Ed. George Levine. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 119–37.
- Rignall, John (ed.). *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2000.

Spinoza, Benedict De. *Ethics*. London: Penguin, 1996.

廣野由美子「近代の魔女 — *The Mill on the Floss* における異端の表象」, 『英文学研究』 Vol. 81 (日本英文学会, 2005), 41-53.